

令和6年第1回大河原町教育委員会定例会会議録

- 1 招集日時 令和6年1月18日(木) 午後2時00分
- 2 招集場所 大河原町役場 2階 第1会議室
- 3 出席委員 舟山幸枝委員、一盃森広志委員、丹羽宜博委員、片倉亜寿香委員、鈴木洋教育長
- 4 説明のため出席した者
櫻田尚 教育総務課長、木村武俊 生涯学習課長、小野寺淳一 学校教育専門監
- 5 開 会 午後2時00分
- 6 令和5年第12回教育委員会定例会会議録の承認について
鈴木教育長 | (委員全員に諮って) 承認する。
舟山委員、一盃森委員 署名。
- 7 教育長報告
(1) 一般事務報告 なし
(2) 専決事務報告 なし
- 8 議 事
議案第1号 昆虫標本維持管理会計年度任用職員の任命について
生涯学習課長より説明。
鈴木教育長 | (委員全員に諮って) 可決する。
- 9 その他
(1) 教育長報告(校長会資料による報告)
 - 1 「内外教育」から2題
 - (1) 教員のやりがいについて(小野元之)

教員になる数が少なくなっている。国が主導して働き方改革や教員の処遇改善を図るべきである。改革が進めば教師を目指す若者も増えてくる。

(2) コミュニティ・スクールの二つの効果（佐藤晴雄）

コミュニティ・スクールの効果として、「宣伝効果」と「協議効果」があるという。学校運営協議会の設置により、「学校は地域に支えられ、学校は地域に恩返しする」という意識の醸成が図られ、学校教育の質的向上につながっている。

2 不登校関連

(1) 「失敗させる覚悟持って」（奥真由美）

全国的に不登校の増加。小学校低学年から増加している。これまでは、中学1年生からが多い状況であった。どのように対応するか、多様な対応が求められる。

子供の自立を目指すのであれば、子供に失敗や自己決定の機会を与えなかったり過保護でいたりしては、自立しない。

(2) 「視野拡大へ長男の経験生かす」（金子あかね）

不登校の先にも色々な人生が待っていると語る。「不登校の時間は無駄ではなく、その子にとっては必要な時間」と言っている。

(3) 「学校復帰の促しは悪か」

「人と出会い、磨き合い、助け合い、不条理を知り、自己実現を図ることを学ぶ装置として学校ほどのものはない」早期に背中を押してやれば、戻れる子も多いのではないかと説く。

(4) 「さくらんぼと不登校」

算数の「さくらんぼ計算」が出てくる。一説にはこの計算が原因で不登校に繋がると言われている。

(5) R4 宮城県長期欠席状況調査結果（義務教育課）

不登校のきっかけは、「気力がわかない」が小中ともに1位。不登校継続の理由も「気力がわかず何となく登校しない」がトップである。家庭での過ごし方は、小中の6～7割が「インターネット、スマートフォン」である。しかし、不登校児童生徒の卒業後の進路は92.3%が高校進学しており、決して諦めることはない。

(6) 「定時制高校から世の中を見てみたら」（藤井健人）

文部科学省職員で不登校を経験している。みんなと同じ道を歩みたかったと語る。学校と不登校の増加は教育の在り方をつきつけられる大きな事案である。しかし、不登校になっても、色々な道があることを保護者や不登校の子に分かってほしい。

3 言葉について

(1) 『その「一言」が子どもの脳をダメにする』(成田奈緒子他)

脳の発達について、規則正しい生活や十分な睡眠を取る生活をさせる事が重要。朝ごはんもしっかりと食べさせる。子どもたちの脳は、親の与える生活環境によって良い方向にも悪い方向にも育つ。何気ない一言で脳の育ちは決まるので、努力した過程を褒めるのが重要。

(2) 『言葉で子供がこんなに変わる』(野口芳宏)

先輩教員の言葉。「通信表は少なくとも4人の人に見られる。本人、父、母、仏壇の先祖。」通信表は、所見欄に書かれた言葉の一句一語まで、大変な関心をもって読まれる。誤解が生じないように、事実と解釈を区別して書くことを奨励。

4 『子どもたちに民主主義を教えよう』(工藤勇一他)

いじめ問題。子供たちが自分たちで解決しないで、親が絡んできて複雑化している。子供たちが自分で解決する機会を奪っているという主張である。

三者面談について。目的は「情報の共有」ではなく、「みんなが元気になる」こと。学校と保護者、学校と子供の信頼関係が増す三者面談が重要。

5 保護者対応

(1) こじらせない保護者対応の基本(ヴィヒャルト千佳こ)

親子関係がよくない家庭には、親に対して子をほめ、子が親を好きなことを伝える。また、面談をするときは、最初はとにかく傾聴等、参考になる内容である。

(2) 犯罪に該当する保護者の行動(師子角允彬)

保護者の行動で犯罪に該当するものもある。学校の適切な対応例の紹介。

(3) 若手教師を全校体制でフォローする(藤木美智代)

保護者対応に関する若手教員への支援内容等を説いている。

(4) 保護者同士のトラブルが持ち込まれたら(千葉孝司)

大人の子供化が子供同士のトラブルを複雑化している。解決のゴールは保護者同士双方の話し合いしかない。

6 健やかな体

(1) 『体育がきらい』(坂本拓弥)

(2) 「からだ」から世界把握

体育の二極化が進んでいる。体育を嫌いになってもいいが、自分の身体に関心を持って欲しい。

(3) 学校保健統計調査結果(身長・体重・肥満傾向)

町内でも肥満傾向の生徒が多い。原因として二極化や運動不足もある。課題の一つである。

7 中学校 IBA リーディング・リスニングテスト

年々、英検3級合格程度の割合が減ってきている。小学校での英語力が中学校での学習に上積みされていないような状況である。分析が必要。

8 その他

各校の授業、研修会、大会、事業の様子について資料により説明。

舟山委員	P13 藤井健人さんの話。不登校の話。あなたはそのまま良いと寄り添った言い方をしているが、結局は社会参画の障壁になっていると言っており、このような考え方があるのだと感心した。 藤井さん自身が定時制高校からどのように障害を乗り越えてきたか、気持ちの変遷などもあればありがたかった。自分が知らない考え方で感動した。
丹羽委員	同様に藤井さんの話。自分の人生で、不登校を克服できたと思ったことは一度もないと言っている。自分の境遇の偏見なのか。 新しい不登校の子をよりよく成長させていけるような仕組みづくりが大事。あと、安心できるように不登校でも進学できることを親に伝えるのが大事。
舟山委員	不登校の子が高校を出ての社会生活のデータがあれば良い。格差社会で苦しんでいるのではないか。
鈴木教育長	文科省のデータで、小・中不登校の子が20歳時点で、8割の子が就労しているか、学校に通っているデータがある。
一盃森委員	藤井さんの話。結論的に、現行の制度をどのようにするのが良いのかの話があれば良い。提案してほしかった。 小中と不登校だったからといって、人生すべてが終わりではない。評価が付けられなかったとしても。
小野寺専門監	現在は、タブレットが配布されたことにより状況が変わっている。不登校の子が学校に来なくても、タブレットを通して、課題のやり取りやオンラインで授業配信もできる。家にいても課題の提出により、評価できるようになる。

片倉委員	現在は、このような手段も伝えている。
丹羽委員	教育に関し、様々な問題があると感じた。
丹羽委員	子供は自立できれば良い。当たり前の生活ができれば良い。どのような職業でも構わない。行動の中で生活の中で、親として人間として社会人として、どのように生きるかを示すという事が大事。
一盃森委員	P30 野口先生の話。問題のある学級ほど健全であるという。まさに、問題が顕在化している学級は健全である。今は、見えないところで、SNSなどで問題が発生しており大変である。
舟山委員	通信表の所見の話。是非、先生方に誠意をもって書いてほしい。
舟山委員	過去に、通信表に対し重みが分からなかった若い教員もいて、指導した話を思い出した。
丹羽委員	P5 教員のやりがいについて。先生方がいかに幸せな仕事だという事を自覚してほしい。

(2) 各課長報告

教育総務課長、生涯学習課長

令和5年度行事予定について説明。

10 次回教育委員会の開催日程について

鈴木教育長 | 次回の定例教育委員会は令和6年2月13(月)午後2時から開催する。

11 閉会宣言 午後4時00分

令和6年2月13日

署名委員

署名委員